

注意 字数が指定されている設問については、「、」「や」「。」も一マス使いなさい。答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

① 次のそれぞれの問いに答えなさい。

- 一 次の①～③の意味に合う慣用句が完成するよう、空欄に入る適当な漢字一字をそれぞれ答えなさい。
- ① ひどく感心して驚く。：（ ）を巻く。
- ② 自分の力では処理できない。：（ ）に余る。
- ③ 弱点をつかれ、聞くのがつらい。：（ ）が痛い。

② 次の①～③のA・Bの――の部分のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

- ① A 責任をツイキユウする。  
B 利益をツイキユウする。
- ② A 相手の主張にイギを申し立てる。  
B 人生にイギを見いだす。
- ③ A 友人の心中をオし量る。  
B 風で木がオし倒される。

③ 次の①～⑥の漢字の部首をそれぞれ記号で答えなさい。

- ① 薰 ア… イ… ウ重 エ薰
- ② 魔 ア鬼 イ广 ウ麻 エ木
- ③ 因 ア大 イ口 ウ因 エ一
- ④ 卓 ア日 イ早 ウ十 エ一
- ⑤ 婆 ア又 イ皮 ウ女 エシ
- ⑥ 聴 ア十 イ心 ウ四 エ耳

④ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

地球が誕生した当初、大気中には酸素がありませんでした。そんななか、今からおよそ三八億年前にはじめての生命が海のなかで生まれました。バクテリアです。酸素のない環境に適応した嫌気性の生物です。

⑤、三〇億年ほど前になって、光合成をするバクテリアが生まれました。これはシアノバクテリア(ラン細菌、またはラン藻と呼ばれています。これはシアノバクテリア(ラン細菌、またはラン藻と呼ばれるようになります。この生物が光合成をはじめたことで酸素がつくられるようになりました。その結果、海水中の酸素濃度がしだいに上がり、それが大気へも拡散していったのです。

その後、二〇億年ほど前になったときに光合成をする真核生物、藻類が現れました。真核生物とは細胞内に核膜を持った生物で、そのなかに主要な遺伝子が包みこまれています。これは核膜を持たないバクテリア(原核生物)とは細胞の構造が大きく異なります。ちなみに、現存する生物は、バクテリアとシアノバクテリアを除くとすべてが真核生物です。海のなかでは真核生物の藻類が現れたことで酸素の生産が加速され、大気中の酸素濃度が高くなりました。

⑥ 大気中で大きな変化が起きました。⑦大気中の酸素が太陽

から送られてきた紫外線と反応してオゾンが生まれたのです。このオゾンが成層圏の下層に広がり、大気中での紫外線の透過を妨げるようになりました。

それまでの生物は、すべてが海のなかでくらし、陸上には存在していませんでした。その大きな理由は紫外線の悪影響にあつたと考えられています。紫外線は生物の持つ遺伝子を壊すので、生物にとって大変有害なものです。地球上に大量の紫外線が降りそそいでいたために、生物は生きていくことができませんでした。唯一、生息できる場所だったのが、水のなかです。なぜなら、紫外線は水に吸収されてしまうので、紫外線が水中に入るとその量は急速に減衰します。そのため、水中の生物は紫外線の悪影響を受けずにすんだのです。

⑧、大気中のオゾン層がつくられたことで地上に降りそそぐ紫外線量が大きく減少しました。これが生物の陸上への進出を可能にしたのです。その結果、コケ類やシダ植物が上陸し、それに遅れて陸上で生活するさまざまな動植物が現れるようになったのです。

⑨、ここまでのことを「作用」「反作用」という視点から考えてみましょう。  
まず、最初に生まれた生物は嫌気性バクテリアです。これは、酸素がないという非生物的環境があつたので、このような生物の誕生につながりました。そこで⑩この生物の出現には「作用」がはたらいたと考えられます。ところが、この嫌気性バクテリアが進化してシアノバクテリアが生まれました。⑪この生物と、その後に見られた藻類によって、海中はもとより大気にも酸素があふれるようになりました。これは生物が大気環境を変えたので、大きな「反作用」のはたらきといえます。その際、環境中に酸素が増えたため、酸素を嫌う嫌気性生物の多くが死滅することになりました。今も嫌気性バクテリアは地球上に生息していますが、それは土壌中や水域の底泥のなかなど、酸素のない場所に限られています。海水中で生を謳歌していた嫌気性バクテリアの衰退は、環境中での酸素濃度の上昇がまねいたものなので、これは「作用」の結果ですね。また、成層圏につくられたオゾン層が、多くの生物の陸上での分布の拡大と進化を促したのも「作用」ですね。

このように、⑫地球の歴史を考えても作用と反作用がはたらいており、非生物的環境と生物群集はおたがいに影響し合いながら変化をつづけてきたことがわかります。

ここで重要なことはシアノバクテリアと藻類の誕生です。これらの生物は光合成をすることで海中や大気中に酸素をあふれさせました。そして、それまで生物圏を⑬席卷していた嫌気性生物の多くを絶滅に追いやったのです。このことを考えると、シアノバクテリアと藻類がいまの人類に似ているように思いませんか。いまの人類も、大気環境をふくめて地球上の多くの環境を変え、その結果、多くの生物種が絶滅し、または絶滅の危機に瀕しています。

いま、人類のこの環境へのはたらきかけが問題視されていますが、

受験番号	
氏名	

①地球の歴史を見ると同様のことが起きていたのです。  
したがって、湖のなかの生物群集と非生物的環境とのかかわりを  
知ることによって、また地球上の生物たちの進化の歴史を理解する  
ことによって、私たち人類が今後どのように生きていったらよいか、  
そのヒントが得られるかもしれません。

『ミジンコはすごい！』花里孝幸著 岩波ジュニア新書

- ① 空欄④⑤⑥に当てはまる語を、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。
- ア さて イ ところが ウ そして エ すると
- ② 「◎大気中の酸素が生まれたのです」とあるが、この結果どのようにになったのか。「大気中のオゾン層がつくられたこと」の後につなげて、本文中の語句を使って五十五字以内で答えなさい。
- ③ ——の部分④⑤が指すものを、本文中からそれぞれ十字以内で抜き出して答えなさい。
- ④ 「①地球の歴史を考えても作用と反作用がはたらいており」とあるが、この場合の「作用」と「反作用」を説明した次の文の(ア)(イ)に、適切な語句を本文中からそれぞれ漢字二字で抜き出して答えなさい。

「作用」とは(ア)が(イ)に影響を与えることであり、「反作用」とは(イ)が(ア)を変えることである。

- ⑤ 「①席卷していた」とあるが、その使い方として適当なものを次の中から一つ選び記号で答えなさい。
- ア 私たちを席卷していたエアコンが止まった。  
イ スマートフォンの市場をA社が席卷していた。  
ウ 彼が席卷していたので会議が長引いた。  
エ 外出先で彼女に席卷していた。
- ⑥ 「①地球の歴史を見ると同様のことが起きていたのです」とあるが、その内容として適当なものを次の中から一つ選び記号で答えなさい。
- ア 人類が自分たちのために多くの環境を変えた結果、多くの生物種が絶滅した。  
イ 人類が環境を変えながら進化を遂げたことで、理想的な世界が確立された。  
ウ シアノバクテリアと藻類の誕生した結果、他の生物と共存しながら発展するシステムが確立された。  
エ シアノバクテリアと藻類の誕生は、光合成が生物界の頂点であることを示した。

③ 次の文章は、八百屋の息子の真澄が高校三年生の夏のある日、家のテレビで流れていた甲子園の決勝戦を見ている場面である。真澄は高校一年生の時先輩との衝突で野球部をやめ、野球とは縁がない高校生活を送っていた。これを読んで後の問いに答えなさい。

京浜のサウスポーは、どちらかと言えば技巧派だった。130キロ中盤のストレートと、どろんと落ちるカーブを操り、打者を翻弄していく。もちろん悪いピッチャーとは思わなかった。しかし、この時点では、真澄はまだ京浜のピッチャーを過小評価していた。これが、決勝まで勝ち残るほどだろうか？コントロールだけなら自分でって負けていない。

だが、太陽がわずかに西に傾き始めた、延長十三回のことだった。ツーアウト満塁という④のピンチを迎えたところで、京浜の投手はゆっくりと空を仰いだ。

ふわっと両手を広げ、長くゆっくりと息を吐きだす。そして目を見開き、かすかにほほ笑んだかと思えば、今度は打者を見下ろすようにしてマウンド上で仁王立ちする。集まろうとする内野手をいらないと手で制し、大きく腹から声を張った。銀色の眼鏡に西日がキラリと反射した。

その立ち振る舞いに、気づけば真澄は圧倒されていた。甲子園を埋め尽くす客の歓声も、楽器や風の音も、窓の外の虫の鳴き声まで消えたように感じられた。

投手としての力はたしかに土田の方が上だった。それなのに⑤の光景を目の当たりにしたとき、真澄はハッキリと京浜の勝利を確信した。

(中略 試合終了直後、真澄は自宅のパソコンで土田と星について調べていた)

次に目に留まったのは、二人の進路についての書き込みだった。土田の方は早々にプロ入りを表明していたらしく、いくつもの記事がヒットする。星に関しての情報は、高校野球ファンが集まる殺伐としたアングラサイトの中にあつた。

“銀縁くん早稲田確定。京浜内部では有名な話です”

しばらくの間ボンヤリと文字を見つめ、⑥次第に胸がざわめき始めた。突然、目の前にチャンスが舞い降りたかのような気持ちだった。

閉め切っていたカーテンを開くと、窓から強烈な西日が差し込んだ。もちろん、甲子園を赤く染めるのと同じ太陽だ。

ゆっくりと窓から目をそらし、押し入れを開けた。目に触れないようにしまい込んでいた段ボール箱を取り出し、幾重にも巻いていた新聞紙を丁寧に解いていく。

ほとんど新品のままのグローブが姿を見せた。高校入学時、父が買い与えてくれたものだ。手を差し込む部分に「世界へ羽ばたけ！深野真澄」という謎の刺繍が施されている。思えばこのメッセージこそが、先輩たちに眼をつけられるきっかけだった。

型を整えるように、グローブの中を二、三度たたき。すると、まだ幼かったころのように背中がうずいた。そうすることが当然のように、真澄の足は一階へ向かっていた。驚いたことに、父もまたどこからキャッチャーミットを引っ張り出してきて、パンパンとやっていた。よほど決勝戦に感動したのだろう。馬鹿みたいに目が赤い。

どちらからともなくうなずき合って、近くの空き地で数年ぶりにキャッチボールをした。無言でボールを放りながら、真澄はそのタイミングをうかがった。

「ねえ、お父さん。俺も早稲田に——」

だが、そこまで言っただけで声が詰まった。息子がまた野球を始めようとしている。しかも、たった今テレビで感動したスター選手と一緒にやりたいという。父は絶対に喜ぶし、そのための努力は惜しまないでくれるだろう。でも、④だからこそ迂闊に伝えることができなかった。

私立大学の入学金に、学費に、寮費に、生活費。野球用具のお金もかかる。高いレベルで野球をしようと思えば、とにかく金が必要なのだ。実際、公立高校に進学した理由の一つはそれだった。貧乏な八百屋にはきつすぎる。

「なんだよ？早稲田がどうしたって？」

相変わらず父のコントロールはひどいものだ。胸に構えればワンバウンドし、顔に構えればジャンプしないと届かない。ベスト16が聞いてあきれれる。真澄は丁寧なボールを投げ返しながら、口を開いた。

「ねえ、お父さんも構えてよ」

キャッチボールは小さいころの日課だった。雨が降ろうが、風が吹こうが、学校から帰ると父はミット片手に待ち構えていた。そして連れていかれる空き地で、父はコースギリギリにミットを構えた。数センチでも外れれば絶対に取ろうとしないのだ。どこまでも転がっていくボールを何度追いかけていったか分からない。けれど、おかげでコントロールだけはよくなった。

真澄の意を悟ったのか、父は無言でしゃがみこんだ。真澄はふつと両手を広げ、長く、大きく息を吐く。

ゆつくりと目を見開き、父をにらみつけて「ハッ！」と腹から声を張った。星の真似をしたかったわけではない。そうすることが自然だった。

ほくそ笑む父を一瞥した瞬間、目の前に鮮やかな世界が広がった。ツーアウト満塁。ツーストライク、スリーボール。真っ赤に染まる空と、自分を取り巻く大観衆。相手のベンチ前にはキャッチボールをする星がいる。イメージした球場は、神宮だ。

右バッターを想定し、父はインコースの低めに構えた。そのミットを凝視し、真澄はゆつくりと振りかぶる。全身の筋肉を弛緩させて……。グローブを高高くつき上げる……。鳥が空を羽ばたくように……。指先にすべての力を集中する……。

幼いころに、父からもらったクリスマスマスパレゼント。『左投手の勝利学』。矢野龍二という無名の元プロ野球選手が書いた本の内容は、今も身体の芯にしみついている。腕を振り下ろした瞬間、紙が切れるような乾いた音が耳元で響いた。それだけで充分だった。

「ねえ、お父さん」

微動だにしない父のミットを見つめたまま、真澄は言った。

「俺、東大に行くよ。東大に行つて、早稲田を倒す」

◎突拍子もないことを言ったはずなのに、父に驚いた様子はなかった。息子が「東大に行く」ことの意味を、その難しさを、うまく理解できなかつたのだろう。

ただ、父はどういうわけか銀縁君の進路は知っていた。ボールを投げ返してきながら、意地悪く笑う。

「銀縁と投げ合うってか？そりゃあ、いいな。甲子園なんかより、やっぱり男は神宮だよな。同い年でラッキーだったな。この年に産んだ俺と母さんに感謝しろよ。」

東大ならば星と投げ合うことができる。六大学という舞台上で、神宮で、対等に野球することができるのだ。そして、それは金をかけずに高いレベルで野球ができるたった一つの方法でもある。そのためには今、自分が頑張ればいいだけだ。

カッコイイことを言いながら、父が返してきたボールは遙か頭上を越えていった。あきれて、苦笑いし、仕方なくボールを追いかけた真澄を、父が呼び止める。

「なあ、真澄。一生懸命頑張つてたら、必ず誰かが見てくれるからな。ホントに東大なら四浪くらいまで許す。というか、頼む。④俺のために頑張つてくれ！」

八百屋の親父は⑧青臭い。そう思ったら、笑えてきた。「四浪もしてたら銀縁くんがいなくなってるよ。せつかく同級生なのに。」

そして、きびすを返し、ボールを取りに向かいながら、今度は心の中で反論する。お父さんのためじゃない。自分のためだ。自分が主役になるために、もう一度野球がしたいんだ。

※土田・・・京浜高校の対戦相手の投手。

※星・・・京浜高校の投手。

※早稲田・・・早稲田大学、東京にある私立大学。

※アングラサイト・・・インターネットのサイトの一種。

※ベスト16・・・真澄の父が高校時代の県予選で残した成績。

※東大・・・東京大学、東京にある国立大学。

『6（シックス）』早見和真 集英社文庫

① 空欄①に入る適当な四字熟語を答えなさい。

② 「⑥この光景を目の当たりにした」とあるが、この時の真澄の

情の説明として適当なものを次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア ピンチに追い込まれても動じない星の姿を見て、ほかの情報

が一切頭に入らないほど心を奪われた。

イ ピンチの場面でマウンドに集まろうとした仲間を制した星の

姿を見て、投手の孤独というものを感じている。

ウ ピンチの場面で気迫を表す星の姿を見て、試合で勝つために

は第一に気持ちが大切だと再認識している。

エ ピンチの場面で弱みを見せまいとする星の姿を見て、その演

技力に同じ投手経験者として圧倒された。

③ 「◎次第に胸がざわめき始めた」とあるが、それはなぜか。四

十 五字以内で説明しなさい。

④ 「①だからこそ迂闊に伝えることができなかつた」とあるが、

それはなぜか。五十字以内で説明しなさい。

⑤ ——の部分◎⑧の語の意味の説明として最も適当なものをそれ

ぞれ選び記号で答えなさい。

◎ 突拍子もない

ア とんでもなく調子はずれな

イ 意味がよくわからない

ウ 矛盾している

エ 想像通りの

⑧ 青臭い

ア 面白い

イ 未熟だ

ウ 予想外だ

エ おかしい

⑥ 本文中における「……」と「——」の用い方についての説明として最も適当なものを次の中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア「……」は、迷っている様子を表現している。  
イ「――」は、ためらっている様子を表現している。  
ウ「……」は、あきれている様子を表している。  
エ「――」は、余裕がある様子を表している。  
⑦「①俺のために頑張ってくれ」とあるが、これに対する真澄の思

いの説明として最も適当なものを次の中から一つ選り記号で答えなさい。

- ア 父が大学で野球をさせてくれることに感謝しているが、真澄は将来野球をやめ自分のために生きようと思っている。  
イ 父がかなえられなかったプロ入りの夢を託されたが、真澄は自分が好きな野球を大学で精一杯にするだけだと思っている。  
ウ 父は真澄が野球で有名になることを願っているが、真澄は大学で高いレベルで野球を楽しみたいだけだと思っている。  
エ 父は四浪してでも合格しろと言っているが、真澄は銀縁くんと戦えなければ意味がないと思っている。  
⑧ 本文の内容の説明として適当なものを次の中から全て選り記号で答えなさい。

- ア 真澄は星のことを大したことのない投手だと見ていたが、京浜高校のピンチにも動じない姿を見て評価を一転させた。  
イ 真澄は高校に入ってすぐ野球をやめてしまったが、甲子園の決勝を見て、再び野球と向き合い努力する決意をしている。  
ウ 真澄は小さいころより父から厳しく野球の指導を受けており、そのせいで野球が嫌いになってしまった。  
エ 真澄は銀縁君の進路を踏まえて東大に行く決意を固め、父もまたその意図をくみ取り息子の背中を押そうとしている。  
オ 真澄は野球がさほどうまくない父に指導されることに限界を感じ、優秀な指導者がいる東大を目指す決意をしている。

④ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「アンパンマンの作者は私です」と言うと、たいていの人はびっくりする。

まさか九十歳過ぎた作家が描いているとは、想像できないのだろう。作者はせいぜい五十歳ぐらいと思っている人が多いのではないか。  
五十歳は、実はアンパンマンを描き始めた年齢だ。それはやがて一九七三年に、『あんぱんまん』という絵本になる。だが、評判はさんざんで、何十年も出し続けるシリーズになるとは、予想もできなかった。

漫画家として独立したあと、舞台演出、詩の雑誌の編集や絵本づくり、テレビ出演など、頼まれるままにいろんな仕事をしてきた。漫画の代表作がないままに、多くの先輩・後輩の活躍をさびしく目で追う日々が続いた。

それでも漫画家であることをやめず、ぎゅうぎゅう詰めの満員電車のように才能がひしめく漫画界に、あきらめることなく立ち続けていた。すると、あるとき、目の前の席が空いた。七十歳になる直前、アンパンマンのアニメ化の話が持ち込まれ、それから一気にブレイクしたのだ。

「継続は力なり」というが、あきらめないでひとつのことを思いを込めてやり続けていると、ちゃんと席が空いて、出番がやってくるものなのだ。

今でこそ、オイドル(ぼくの造語で、「老いたるアイドル」の略)なんて言って楽しく仕事をしているけれど、人生は失意の連続だった。

特に三十代から五十代ごろまでは、絶望のトンネルの中にいた。

漫画家としての仕事のほかにあれこれやっていたので、生活に困ることはなかった。でも、「これが代表作だ」と言い切れるものがない。歌手に持ち歌があるように、漫画家は誰でも知っている人気キャラクターを持たなければ、存在しないのと同じなのだ。代表作をつくりたい。漫画家としてのアイデンティティを持ちたい。

そんな長い間の願いがかない、アンパンマンの人气が高くなったのは、なんと七十代に入る直前、六十九歳のときだった。遅咲きも遅咲き。よく「大器晩成」とおだてられるが、いやいや、「小器晩成」の典型だ。

でも、大器でも小器でも、いいじゃないか。せつかく生まれてきたのだ。絶望するなんてもつたない。

なんとかなるさと辛抱して、とにかく生きていくんだ。

人生は捨てたものではない。やがて道は拓けてくる。それが実感だ。

※アイデンティティ：主体性。自己同一性。

『やなせたかし 明日をひらく言葉』 P H P 研究所編

- ① 本文の内容に合うものを次から一つ選り、記号で答えなさい。  
ア ひとつのことをあきらめずにやり続けていると、あるときチャンスに巡り合えるものである。  
イ 夢に向かって努力し続ける際、精神的な強さを身につけるためにも、絶望感を味わうことは必要である。  
ウ 筆者は五十歳で漫画家として大成したが、それまではほとんど仕事がなく、苦しい生活を強いられていた。  
エ 筆者は、どうしても漫画家としての自信を持つことができず、自分自身のことを「大器」と表現した。

- ② あなたが「継続は力なり」と実感した経験を、百二十字程度で書きなさい。



